

星の女

鈴木三重吉

青空文庫

姉きやうだい妹だい 三人の星の女が、毎晩、美しい下界を見るたびに、あすこへ下りて見たいと言ひくくしてゐました。

三人は或ある晩、森のまん中に、すゐれんの一ぱいさいてゐる、きれいな泉があるのを見つけました。三人ともその水の中へつかつて見たいと思ひましたが、そこまで下りていく手だてがありません。三人は夜どほしその泉を見つめて、ためいきをついてゐました。

そのあくる晩も、三人はまたその泉ばかり見下みおろしてゐました。

泉は、ゆうべよりも、なほ一そううつくしく見えました。

「あゝ下りていきたい。一どでいゝからあの泉であびて来たい。」と、一ばん上の姉が言ひました。下の二人も同じやうに下りたいと言ひました。

すると、高い山のま上を歩くのが大好きな、月の夫人がそれを聞いて、

「そんなにいきたければ、蜘蛛くもの王さまにそう言つて、蜘蛛の糸をつたはつて下しておろおもらひなさい。」と言ひました。

蜘蛛の王さまは、いつものやうに、網の中にすわつて、耳をすましてゐました。星の女たちは、その蜘蛛の王さまにたのみました。蜘蛛の王さまは、

「さあ、下りていらつしやい。私の糸は空気のやうにかるいけれど、つよいことは鋼はがねと同じです。」と言ひました。

三人はその糸につかまつて、一人づつ、するくと泉のそばへ下りて来ました。

泉の面には、月の光が一面にさして、するれんの花のなつかしい香にほひがみなぎつてゐます。三人はきらびやかな星の着物をぬいで、そつと水の中へはいりました。

すがくしい、冷たい水でした。三人はしづかにするれんの花をかきわけていきました。三人のはだには、水のしづくが真珠のやうにきら／＼光りました。

と、その泉のぢきそばに、或ある若い獵人かりうどが寝てゐました。三人

はそれとは気がつかないでにこ／＼よろこんで水を浴びてゐました。うと／＼寝てゐた獵人は、三人の天の女が、泉のすゐれんの花をゆるがせて、水の中を歩いてゐる夢を見て、ふと目をさました。ひぢをたてゝ泉の面を見ますと、まつ青さをにさしてゐる月の光の中で、三人の美しい女が、たのしさうに水を浴びてゐます。

獵人はこつそりと、泉の岸をつたはつて、三人の着ものがぬいであるところへいききました。そして、その中の一ばんきれいな着ものを手に取つて見ました。それは、金と銀との糸でおつて、いろさま／＼の宝石を使つて縫ひかざりをした、立派な着もので、左の胸のところには、心臓の形をした大きな赤い紅宝石ルビーが光つてゐました。

獵人は、その着物をかゝへて、もとのところへかへつて、かくれてゐました。

三人の星の女はそんなことは夢にも知らないで、永い間水をあびて楽しんでゐました。そのうちに、だんくくと夜あけぢかくなりました。すると、蜘蛛の王さまが空の上から、

「もうおかへりなさい。お日さまがお出ましになると、お日さまのお馬が糸を足で踏み切ります。早く空へお上りなさい。」と言ひました。

星の女はそれを聞くと、いそいで岸へ上あがりました。二人の姉はすぐに着物を着て、目に見えぬ蜘蛛の糸の梯子はしごを上のぼつて、大空へかへつていきました。

三人の中で一ばん美しい下の妹は、一しよにぬいでおいた着物が
がないのでびつくりしました。それがなければ空へかへることが
出来ないのです、一しようけんめいにあたりをさがしましたが、見
つかりません。

そのうちに、お日さまがお出ましになりました。お日さまのお
馬は、蜘蛛の糸を足でふみ切つてしまひました。

星の女はとうにくれて、草の上にうつぶして泣いてゐました。
さうすると森の鳥がおきて来て、

「あなたのうつくしいおめしものは、わかい獵人が取つていきま
した。その獵人は、あすこの木の下で、寝たふりをしてゐます。」
かう、さへづつて星の女にをしへました。星の女はそれを聞く

と、すめれんの花をつなぎ合せて花の着物をこしらへて、それだからだをつゝんで、獵人のところへいききました。そして、

「どうか私わたしの金と銀の着物をかへして下さい。そのかはりには、あなたのおのぞみになることは何でもしてあげます。」と、泣きくたのみました。獵人は、

「私わたしは何にもほしくはない。あなたが私のお嫁になつてくれれば何にもいらぬ。」と言ひました。

星の女は、着物を取り上げられては、もう下界をはなれる魔力もなくなつたので、しかたなしに獵人のお嫁になりました。

獵人は、星の女をだいにじにかはいがりました。星の女の姿は、すめれんの花のやうに美しく、その声は、どんな小鳥の声よりも、

もつとやさしくひゞきました。

獵人は毎日獵に出て、食べものを取つて来ました。そして星の女に、その日のいろ／＼の楽しいお話をしました。

しかし星の女は、そういふ中でも、大空のお家うちを忘れることが出来ませんでした。女は、月のでる晩には、一人でするれんの泉のそばに出て、大空を見ては泣きました。せめて二人の姉の星が、もう一ど下りて来てくれ、ばい、のにと思つて、待ちこがれてゐましたが、二人はだまつて青い目をまばたいてゐるきりで、毎晩蜘蛛の王さまが糸をおろ下しても、ちつとも下りて来ようとはしませんでした。

そのうちに、星の女には、つぎ／＼に男の子が三人も生まれまして。星の女はその子たちが大きくなるのを、たゞ一つの楽しみにして暮しました。

そのつぎには、かはいらしい女の子が生まれました。星の女には、その女の子がかはいくつて／＼たまりませんでした。

ある或日^{かりうど}獵人の生れた遠い町からはる／＼^{つか}使が来^ひました。獵人のお父さまが病気で死にかゝつてゐるといふ知らせです。獵人はびつくりして、

「わたしはこれからすぐにいかなければならない。」と言ひました。
星の女はそれを聞いて、

「でもその長い旅の途中で、わるい獣にお殺されになつたらどう
なさいます。」と言つて泣きました。獵人は星の女をなだめて、

「そんな心配はけつしてない。私の父さまには私より外には子が
一人もないのだから、どうしても私がいつて、やすらかに目を閉
ぢさせて上げなければはいさうだ。おとむらひをすませたら、
すぐにかへつて来る。どうぞ子どもたちと一しよにまつてゐてお
くれ。七日たつたらかならずかへつて来る。」と言ひました。す
ると一ばん上の男の子が、

「わたしは父さまと一しよにいつて、お祖父さまを見て来たい。」と

言ひました。獵人は、

「お前はみんなと一しよに家うちにゐて、どろ坊の番をしておくれ。」
と言ひました。男の子は、

「それでは、この森の先まで一しよにいつて、そこからかへつて来るの。そして、母さまと一しよにお家うちの番をするの。」と言ひました。獵人は、その子をつれて森のはづれまで来ますと、

「もうこゝからおかへり。これは家うちのお部屋中の鍵かぎだから、おまへにあづけておく。」と言つて、鍵のたばをわたしました。そして、

「よく言つておくが、どんなことがあつても、二階の小さいお部屋へはいつてはいけないよ。そのお部屋の鍵穴にこの金の鍵がは

まるのだが、あすこだけは、けつして開けてはいけないよ。」と、いくども言つて聞かせました。男の子は分つたくと、うなづきました。獵人は、

「では、なんにもこはいことはないから、おとなしく待つてお出で。」と言つて、わかれしました。

男の子はまた森をとほつて、お家へかへつて見ますと、お母さまが戸口に立つて、しくく泣いてゐます。男の子は、「どうして泣いてゐるの？ 私わたしがかへつたから、どろ坊が来てもこはくはないでせう？」と言ひました。するとお母さまは、

「どろぼうなんかはちつともこはくはない。」と言ひました。

「それでは何が悲しいの？」

「だつて父さまは、もうこゝへかへつては入らつしやらないんだもの。」

「うゝん、さうぢやない。父さまはぢきかへると仰つた。」

「それから私も、もうお家へかへらなければならぬのよ。かへつたら、もう二度と出ては来られない。」

お母さまはかう言つて、またさめ／＼と泣きました。男の子は、

「そんなら私たち三人や、小さな赤ちゃんをみんなおいていくの？」と聞きました。星の女は、さう言はれるとびつくりして、

「いやゝゝ、私はもうどんなことがあつてもかへりはしない。安心しておいで。あの赤ん坊やおまへたちをおいて、どうしてかへ

つていかれよう。」

かう言ひく涙をふきました。男の子はそれで安心して、みんなと一しよにあそびました。

するとその晩、男の子は、外の月のあかりの中で、だれかどうつくしい小鳥のやうな声で、しきりと何か言つてゐるので目がさめました。

聞いてみると、その鳥のやうな声は、

「蜘蛛くものはしごが下りてゐる、早くかへつてお出いでなさい。」といふことを、かなしいふしでうたつてゐます。

そばで赤ん坊に添ちへ乳ちをしてゐたお母さまは、

「ねんねんよく。この子は私の紅ルービー宝石だものを、この子をおい

てはかへれない。」といふ意味を謡うたでうたひながら、赤ん坊の寝顔を見つめてゐました。

すると、外からは、

「そんなら二人でおかへりなさい。紅宝石ルービーをだいて二人で。」と謡ひます。お母さまは、しばらく黙つてゐました。そのうちに、外の声は、また、

「蜘蛛の梯子はしごが下りてゐる。

おまへが七年ゐないとて、

星の二人は泣いてゐる。」

と、また謡ひ出しました。赤ん坊はふと目をさまして泣き出ししました。お母さまは、そつとそのお背中をたゞいて、

「ねんくよ、ねんくよ。かへれくと言つたつて、玉の飾りの着物が無い。」と、悲しさうに謡ひました。

赤ん坊はまたすやくくと眠りました。

それからしばらく、何の声もしませんでした。やがてまた外の月のあかりの中から、

「鍵をおさがしなさい。お前の着物のかくしてある、小さなお部屋の金の鍵を。」と小さな美しい声で謡ひました。

男の子は、その謡を聞いてゐるうちに、一人で、うとくと眠つてしまひました。さうするとその子の夢の中へ、二人の美しい女の人が出て来て、

「いゝ子だから、二階のあのお部屋の戸をあけて下さい。さうす

ればおまへのお母さまはもう泣きはしないから。」と言ひました。男の子は朝、目がさめると、お母さまに向つて、

「わたしゆうべ私は昨夜、だれかゞお母さまに早くおかへりくと言つていくども謡つたのを聞いた。」と言ひました。お母さまは、

「おまへは夢でも見たのでせう。」と言ひました。そして、あとで一人でさめ／＼と泣きました。

男の子は、たしかに目をあいてゐて聞いたのですから、もしほんとうにお母さまがかへつてしまつたらどうしようと思ひく、いちんち昨夜の歌のことばかり考へてくらししました。

三

その夕方、男の子は、ゆうべ二人の女の人が、あの二階の部屋をあければお母さまはもう泣きはしないと云つたのを思ひだしました。そして、さうすればお母さまは、もう家へもかへりはしないでだらうと思ひました。そのときお母さまは、下の二人の男の子と赤ん坊とに水あびをさせに、泉へいつてゐました。

男の子は、いそいで二階へ上つて、小さな金の鍵かぎで、その部屋の戸をあけました。さうするとその部屋の中には、金と銀の糸でおつた、色々の宝石の飾りのついた、きれいな着物がかけてありました。

おろして見ますと、その着物の胸のところには、大きな紅宝石ルービーがついてゐました。飾りの宝石もその紅宝石ルービーも、ちようど夜の空の星のやうに、きら／＼とまぶしく光ります。男の子はびつくりして、その着物をお母さまに見せようと思つて持つて下りました。しばらくするとお母さまは、二人の男の子と、赤ん坊とをつれてかへつて来ました。男の子は、

「母さま／＼、こんなきれいな着物が二階にありました。着てごらんなさい。」と言ひました。お母さまは、それを見ると、うれしさうにほ／＼ゑんで、すぐからだにつけました。子どもたちは、お母さまがその着物を着て、きれいなお母さまになつたものですから、よろこんで踊りまはりました。男の子は、

「父さまがかへるまで、毎晩貸して上げる。そして父さまがかへつたら、私がたのんで、もらつて上げる。」と言ひました。お母さまは、

「今晚赤ちやんを寝かせるまで貸しといておくれね。」と言ひました。男の子は、

「それまで着て入らつしやい。」と言ひました。

男の子はその晩は、いつまでも眠らないで、床の中で目をあいてゐました。さうすると、間もなくまた、外の月のあかりの中か
ら、うつくしいこゑで、

「蜘蛛くもの梯子はしごが下りてゐる。

おまへが七年ゐないとて、

二人の星は泣いてゐる。」

と、小鳥のやうなうつくしいこゑでうたふのが聞えて来ました。

それから、しばらく何の声もしませんでした。こんどは、赤ん坊に添へ乳ちをしてゐたお母さまが、

「ねん／＼よ、ねん／＼よ。わたしのかはい紅宝石ルービーを、どうしておいていかれよう。」と、謡うたひました。男の子は聞いてゐるうちに、ひとりでうと／＼と眠くなつて、お母さまの声がだん／＼に遠くの方へいつてしまふやうな気がしました。そしてそれなり、お日さまが出るまで、ぐつすり寝てしまひました。

男の子は朝、目をさまして、ゆうべの歌のことを言はうと思つて、お母さまをさがしますと、お母さまはどこにもゐません。男

の子は、

「それでは、すめれんの泉へいつたのだらう。」と思つて、そちらへさがしにいきましたが、お母さまはやつぱりそこにもあつてませんでした。それでまた家へかへつて見ますと、お母さまばかりでなく、小さな赤ん坊もあつてました。男の子は、

「これはきつと、悪いどろぼうが、お母さまと赤ん坊をさらつていつたのにちがひない。をとゝひの晩からの美しい歌は、きつとどろぼうが母さまをだましてつれ出さうと思つて謡つたのだ。」と思ひました。見ると、お母さまに貸して上げた、あの玉の飾りのついた、きら／＼した着物もあります。

下の二人のこどもは、母さまがゐない、母さまがゐない、と言

つて泣き出しました。男の子は二人をなだめて、森の中をさがしてまはりましたが、どこまでいつて見ても、お母さまはゐませんでした。二人の子どもは、

「母さまがゐないからこはい。母さまがゐないからこはい。」と言つて、どんなにだましても聞かないで、いちんちおんく泣いてこまらせました。男の子もしまひには、

「母さま、かへつてよ。母さま、かへつてよう。」と言ひく泣きました。二人の子どもは、お腹なかがすいてたまらないのですから、よけいにわあく泣きました。

男の子は、そのうちにふと、お父さまからあれほどきびしくとめられてゐたことを思ひ出して、

「あゝ、しまつたことをした。父さまの言ふことを聞かないで、二階の部屋の戸をあけたので、あの美しい玉の飾りの着物までなくなつてしまつた。父さまがかへつたら、何と言はう、母さまや、赤ん坊がゐなくなつたのも、きつと私が父さまの言つたことにそむいたばちにちがひない。」

かう思ふと、なほく／＼かなしくなりました。

間もなく日がくれて、美しい月夜になりました。男の子は二人の子どもを寢床へ寝かせようとしてゐますと、ふと入口の戸があいて、お母さまが、ゆうべの玉の飾りの着物を着てかへつて来ました。下の二人の子どもは、大よろこびで、お母さまに飛びつきました。

「母さまがゐないからこはかつた。」

「^{わたし}私も怖かつた。」と二人はかはる／＼言ひました。お母さまは、

「もう私^{わたし}がついてゐるから、何にもこはいことはありません。それよりも、みんなさぞお腹^{なか}がすいたでせう。さあこれをおあがりなさい。」と言つて、大空からもつて来た、おいしい果物を分けてやりました。二人の子供はうれしがつて、どん／＼食べました。しかし一ばん上の男の子は、それを食べようもしないで、

「母さま、赤ん坊はどこへいつたの。母さまは私^{わたし}たちをおいていきはしらないと言つたのに、どうしてよそへいつたの。」と聞きました。お母さまは、

「赤ん坊は私の二人のお姉さまのそばで寝てゐます。私はこれからすぐにまたお家へかへつて、遠くから見えて上げるから、みんなでおとなしくおねんねをするのよ。またあすの晩もおいしいものをもつて来て上げるから。」と言ひました。男の子は、

「それではその玉の着物をぬいでいつてね。父さまが、あのお部屋をあけてはいけないと言つたのに、私があけて出したのだから、父さまにしかられる。父さまがかへつたら、私がねだつて、もらつて上げる。」と言ひました。お母さまは、

「そんなことはいゝから、早くこの果物をおあがり。」と言ひました。男の子はさう言はれたので安心して、お母さまとならんで、そのおいしい果物を食べました。

さうすると、だん／＼に金の鍵のことも玉の飾かざりの着物のこともみんなわすれてしまひました。そしてお母さまが美しい着物を着て、美しい人になつてゐるのが、うれしくてたまりませんでした。

四

男の子は、もうお母さまはどこへも出ていかないものと思つて、安心して寢床へはいました。すると、そのうちに、また、ふいと歌の音がするので目がさめました。ちつと聞いてみると、やつぱりゆうべと同じ美しい声で、

「紅^{ルービー}石がしきりと泣いてゐる。

日が出ぬうちにかへらねば、

馬の蹄^{ひづめ}が糸を切る。」

と謡^{うた}ひました。

お母さまは、ちやうど一ばん下の子どもが目をさましたのを寝かすつけてゐました。外の声が止^やむと、お母さまは、

「ねんくよ、ねんねんよ。この子はこよひつれていく。この子にこゝで泣かれては、私^{わたし}もお空で泣くのだから。」と、言ひく涙をふきました。

一ばん上の男の子は、またひとりでに眠くなりました。そして、「明日は母さまにさう言つて、赤ん坊をつれてかへつてもらはう。

さうすれば母さまはもうじぶんのお家^{うち}へかへらないですむだらう。
」と、かう思ひ／＼寝てしまひました。

あくる朝目をさまして見ますと、お母さまは、いつの間にか、
一ばん下の弟と一しよに、ゐなくなつてゐました。二ばん目の弟
は、母さまがゐないと言つてわあ／＼泣きました。男の子は、

「泣かなくてもいゝよ。母さまは夜になればまた来て下さるから
。」と言つて、なだめました。しかし弟は、何と言つても泣き止^や
まないの、しまひには涙で目がまつ赤^かにはれました。

そのうちに、日がくれて、空には星が一ぱい出ました。すると
間もなく、入口の戸があいて、お母さまがかへつて来ました。

二ばん目の男の子は、走つて来て、お母さまの手に取りついて

泣きながら、

「二人きりでこゝにゐるのはいや。母さまのお家うちへつれてつて。」
と言ひました。

お母さまは二人に頬ほほずりをして、またゆうべのやうな、おいしい果物を分けて食べさせました。一ばん上の男の子は、

「母さまはどうく二人ともお家うちへつれてつてしまつたのね。父さまがかへつたら、何と言へばいいの。」と心配さうに聞きま
した。お母さまは、

「それはまたあとでお話するから、早くお食べなさい。」と言ひ
ました。

男の子は、ひもじくてたまらないので、急いで果物を食べまし

た。そして、もう悲しいことも心配ごともわすれて、お母さまと楽しくお話をして、しまひに寢床へはいりました。

男の子は明け方ぢかくに、ふと目がさめました。さうすると、また外に歌の聲がしてゐました。

「日が出ぬうちにかへらねば、

馬の蹄が糸を切る。

二人は夜どほし泣いてゐる。」

と、小鳥のやうな美しい声で謡つてゐます。お母さまは、二番目の子が目をさましたのを寝かせながら、

「ねんくよ、ねんくよ。この子が寝たらつれていく。あとでこの子に泣かれては、私もお空で泣く^{わたし}のだから。」と、悲しさう

に言ひました。

男の子はその歌を聞きながら、またすやくと寝入つてしまひました。

朝起きて見ますと、窓にはもう日かげがまつ黄色にさしてゐました。そして、お母さまも弟もみんななくなつてゐました。

男の子はいちんち一人で泣きつゞけて、涙で目がまつ赤にはれました。

やがて夜になつて、大空に星がかゞやきはじめたと思ふと、また入口の戸があいて、お母さまがかへつて来ました。男の子はお母さまの手に取りすがつて、

「母さまはどうしてみんなをつれてつてしまつたの。父さまがか

へつたら、びつくりするよ。早くみんなをつれてかへつてね。ねえ、母さま。父さまがかはいさうだから。」と、たのみました。お母さまは、

「そんなことはあとにして、早くこれをお上りあがなさい。」と言ひながら、空からもつて来た果物をたくさんならべました。しかし男の子は、いくらすゝめても食べませんでした。お母さまは、

「それでは、これから私わたしと一しよに、おまへの大好きな赤ん坊と、あの二人の弟たちのところへいきませう。さあお立ちなさい。」と言ひました。男の子は、

「私わたしは一人でこゝにある。父さまは、かへるまでちやんとお家うちの番をしてお出いでと言つたから、私は一人で番をするの。」と言ひ

ました。

「それでは私わたしはもういきますよ。父さまは明日かへつて入らつしやるはずだから、おかへりになつたらさう言つて下さい。母さまは、玉の飾りの着物を見つけましたから、もうお家うちへかへりましてと言つて下さい。母さまはこれまで長い間、毎日くどんなにお家うちへかへりたかつたか知れませんが、もう今晚きりで二どとこへは来ないから、よく母さまのお顔を見ておおき。それから父さまが、なぜ二階のお部屋をあけたとお聞きになつたら、二人の女の人が、夢の中で、母さまが泣いてゐてかはいさうだからあけてお上げと言つたから、開けたのですとお言ひなさい。」

お母さまはかう言ひくさめ／＼と泣きました。

「母さまのお家はどこにあるの？　こゝからよつほどとほいの？」
と、男の子は聞きました。

「それは、あとでお父さまにお聞きなさい。」
星の女は、かう言つて、間もなく空へかへつてしまひました。

五

あくる日になりますと、男の子はお父さまがもうかへるか、もうかへるかと思ひながら、いちんち戸口に立つて待つてゐました。さうすると、やつと夕方近くなつて、向うの森の中に、お父さま

のかへつて来る姿が見えました。男の子は走つて迎へにいつて、「父さま、わたし私はずるぶん悪いことをしたの。女の人が二人、私が寝てゐるうちに来て、母さまがかはいさうだから、二階のお部屋をおあげと言つたから、金の鍵かぎであけたの。さうすると玉の飾りの一ぱいついた、きれいな着物があつたから、母さまに見せたら、母さまが貸してくれと言つた。そしてその晩、外からたれかうた謡をうたつて母さまをよぶと、母さまはその着物を着たまゝいつてしまつたの。」

かう言つて泣き〜話しました。お父さまはそれを聞くとびつくりして、

「ごらんよ、わたし私のいふことを聞かないから、おまへたちはどうノ

「母さまをなくしてしまつたぢやないか。しかしもう悔くやんでも仕方がない。お部屋をあけたことは、ゆるして上げるから、これからはけつして父さまのいふことにそむいてはいけないよ。母さまはそのうちには、おまへたちを見たくてかへつて来るかもわからない。これからみんなで赤ん坊のおもりをして、たのしくくらすことにしよう。」

かう言つて、涙をこぼしました。

「でも赤ん坊は母さまが、あの玉の飾りの着物を貸してくれと言つた晩に、一しよにつれていつてしまつたの。」と男の子は言ひました。お父さまは、

「赤ん坊もいつたのか。」と悲しさうに言ひました。

「しかし、あの子はお乳がないとこまるから、母さまのそばにゐた方が仕し合あだ。それでは四人で一しよにくらしていかう。」

「でも母さまは、そのあくる晩と、またあくる晩に、二人ともつれてつてしまつたの。ゆうべは、私わたしをつれに来たけれど、私は父さまがかはいさうだから、いかないと言つたの。」

男の子がかう言ひますと、獵かりうど人は、よろこんでだき上げて、

「よくいかないでゐてくれた。それではこれから、どんなことがあつても、おまへは父さまのそばをはなれないかい？」と頼ほまずりをして言ひました。

「私わたしは、いつまでも父さまと一しよにゐるの。そして、父さまのいふことをよく聞くの。」と男の子は言ひました。二人は、その

まゝ森の家うちでくらししました。

獵人は毎日、その子をつれて獵に出て、夕方になるとまた一しよにかへつて来ました。しかし男の子は、毎日お母さまのことがわすれられませんでした。夜になつて、大空に星が一ぱい出ると、男の子は一人で門口へ出て、そのたくさんの星の中の、どれがじぶんのお母さまか、どれが妹か弟かと思ひながら、いつまでも空を見上げてゐました。

それから寢床へはいつて寝るときにも、いつもお母さまや妹や弟たちにあひたいとおもつて一人で泣きました。

そのうちに、お母さまたちがゐなくなつてから一年になりました。すると、或ある晩、夜中に、獵人は男の子を呼びおこして、

「こゝへお出いで。早くお出で。父さまは急に気分が悪くなつた。」と言ひました。男の子はびつくりして、そばへいつて見ますと、お父さまはまつ青さをな顔をして目をつぶつてゐました。男の子は、お父さまの手をさすつて、

「今日はあんまり遠くまで歩いたからよ。あしたは猫を休んで家にありませうね。」と言ひました。お父さまは、

「あゝ、くちびるがかわく。冷たい水を飲ましてくれ。」と言ひました。男の子は、おほいそぎでするれんの泉へかけていきました。お父さまはその水を一口飲むと、そのまゝすやくと眠つてしまひました。男の子は夜どほし起きて、そばについてゐました。猫人は、とうとう夜明けまへに死んでしまひました。男の子

は、大声を上げて泣きました。

夜が明けると、男の子は泣きく／＼木を切り集めて、お父さまの死骸しがいを焼きました。男の子は、もう、たつた一人でこの森にゐるのはいやでした。でも、どこと言つていくところもありません。男の子は、森の草の上に顔を伏せて、せめてもう一どお母さまにあひたいと思ひながら、日がくれるまで泣きつゞけに泣いてゐました。

やがて、大空には星がかゞやきはじめました。すると蜘蛛くもの王さまは、おほいそぎで下界にとゞく梯子はしごをつむぎ出しました。星の女はそれにつたはつて、泣いてゐる男の子のところへ下りて来ました。

男の子は泣き／＼お父さまのなくなつたことを話しました。お母さまも、さめ／＼と泣きました。そしてしまひに、

「もういゝから、泣かないでくれ。私は、^{わたし}おまへがかはいさうだからむかへに来たのです。さあこれを食べて、一しよに母さまのところへいらつしやい。」

かう言つて、空からもつて来た果物を食べさせました。男の子はそれを食べると、一人でに悲しさをわすれて、お母さまと一しよに、空へ上りました。

そのあくる日、二人の旅人が森をとほりかゝつて、獵人^{うち}の家へはいりました。すると、家^{うち}の中には人が一人もゐないのですから、二人は変に思つて、

「それでは、この家の人がかへるまで、二人でこゝに住んでるよ
う。」と相談しました。しかし、家の人は、いつまでたつてもか
へつては来ませんでした。二人の旅人は、とう／＼死ぬまで、長
い間そこでくらししました。

二人はその間、いつも月のてる晩には、すゐれんの泉の中で、
三人の女と、四人の子どもとが、楽しさうに水を浴びてゐる声を
聞きました。そして明け方になると、かならず空の上から、

「おかへりなさい。お日さまがお出ましにならないうちにかへら
ないと、お馬が梯子はしごをふみ切つてしまひます。」

かう言つて、みんなをよぶ声が聞えました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第三巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「星の女 世界童話集第三編」春陽堂

1917（大正6）年8月

入力…tatsuki

校正…伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星の女

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>